書評 「講座 学校学」編集代表 吉本二郎
大阪大学 金 子 照 基

本講座は、全七巻により構成され、吉本二郎教授を編集代表として、各巻ごとに学界の第一線で活躍されている2名の編集委員のもとでまとめられている。本講座は、今日の「教育の危機」の状況のなかで、問題の根本的な解明には、「学校の在り方の基本的指針となる理論的根拠の定立が急務」であるという吉本二郎教授の真摯な学問的立場から、「学校学」の体系的確立をめざして編集されたものである。

まず、本講座の構成を紹介すると、第一巻は、学校学の科学的かつ体系的な確立の意義とその基本的な方向について提言する『学校』であり、第二巻から第六巻までは、現実の学校を五つの観点から分析し、その改善の課題と方向について解明している。すなわち、子どもと学校の実態にせまる『学校の生活』（第二巻）、学校教育の内容と方法を基本的に追究する『教えることと教えた』（第三巻）、学校の教育組織を経営的観点から分析する『学校教育のしくみと働き』（第四巻）、教師の個人的、集団的実態と資質の向上について論及する『育つ教師』（第五巻）、学校に直接に影響を及ぼしている社会的条件と環境を教育体制論的に分析する『学校をとりまく勢力』（第六巻）、そして学校として教育目標の実現において積極的に取組む方策をまとめた『学校の経営戦略』（第七巻）からなり、実践学としての学校学という本講座の特色を発揮しようとしている。

本講座の内容について具体的に紹介し検討する紙数がないので、以下、通読した感想をもとに、学校学について若干の私見を述べておきたい。まず本講座を通読して深く触発されたことは、現実の教育実践の課題にたたえうる新しい実証科学として、「学校学」の理論体系を確立する必要があるということである。しかし同時に、一つの学問体系として「学校学」を確立することが、いかに困難であるかを痛感させられた。

本講座では、実質的には42の視角から、学校についての現在の教育学研究の成果としての知見を総合的に収集整理されている。それだけに、学校の在り方を基本的に問いかけながら真の教育を探究する実践家や研究者に、貴重な示唆を豊かに提供している。研究者の立場からは、その総合的な知見を基盤にして、一つの学問体系としての「学校学」を、それぞれの立場から再構成することを容易にしている。この点からも、本講座の企画の意義がきわめて大きいことは、改めて指摘するまでも
ただ、一般的にいわれているように、一つの学問には、固有の対象と独自の方法がなければならない。それにに基づく研究の成果が一つの理論として構造的に体系化されていなければならない。この学問的確立への地道な追求は、今後の課題であるとしても、今日、教育経営学も学問的には非常に未熟ではあるが、それとは独立して、同じく実践学的性格の強い「学校学」を確立することの本当の意義はどこにあるのですか。あるいは、教育経営学は、もっと研究上の対象と焦点をを明確にさせて、「学校学」として再出発すべきであるという鋭い問題提起が含められているのでしょうか。

臨教審答申では、現在を「文明史的転換期」としてとらえ、「生涯学習体系への移行」が提唱されたが、その体系のなかで学校はいかに位置づけられるのか、まさに学校そのもののが根本的に問われている。たとえば、現在の学校の年齢的な段階化と学校の接続、連関の仕方で人間教育は可能であるのかという制度論的問題を考慮して、「学校」の全体をあてた研究は可能であろうか。また、新しいメディアを通して学校のネットワーク化や新しい学校の脱皮さって、現実には模索されている。「学校学」が、現実に存在している学校についての社会科学的分析によって、「あるべき」学校ではなく、「ありうる」学校の実践的理論の確立をめざすとすれば、新しい学校への模索が現実にかかっている課題と問題点、あるいはその展望について具体的に考察した論考も必要であったろう。

「学校学」の理論的体系化への具体的な提唱に触発されて、本講座をさらに充実させるために必要と考えられるようなことを指摘することを、誰にでも容易にできることである。しかし、まさに「教育の危機」に直面して、その深刻な問題の解明への理論的根拠を立てるために、「学校学」はいかに構造的に体系化されていかなければならないのか、そしてそれは、教育経営学と学問研究上いかに関連づけられるのか、本講座を共通の素材にして、真の一で論議されることを心から期待したい。

（発行所　第一法規出版株式会社　1988年、各巻270頁）